

享学史への二ころみ

―付△田村▽の作者考定―

味方 健

△田村▽の△前クセ▽に「セイヨウのカゲ  
緑にて」とあって、古来、謡本に青陽・青楊二  
様の漢字が宛てられている。本来△鶴龜▽で  
人口に膾炙している「それ青陽の春になれば」  
の青陽であろう。青陽、春というのは表現に  
重複があり、ただ青陽とのみいえば、春の謂  
いである。夏・秋・冬をそれぞれ朱明・白蔵・  
玄英というにあい並ぶ。「春色いまあたり  
満ちて」というくらいの意味だと思われる。

元和卯月本・寛永卯月本、あいだは省略して  
明治26年青藤本・明治45年青久本・大正9年  
元滋本・昭和6年左近本、安永喜多本などが  
陽、これに対して車屋本・擬車屋本・光悦  
本・擬光悦本、降って大正8年以後の各種観  
世流改訂本（丸岡本）・梅若本・観世流大成  
版などが楊、江戸諸版本は両者あいまじる。  
注釈書では、『謡抄』・大和田氏の『通解』

『評釈』、佐成氏の『大観』が楊、『拾葉抄』  
は陽を採り、『謡抄』に楊とするすよしをい  
う。決定的なのは元章の明和本で、「楊柳の  
陰みどりにて」と改変している。

青楊は『大漢和』に拠れば「かはやなぎ、  
水楊の異名」として、その典拠を挙げるが、  
謡本の表記者は、かならずしもその意でなく、  
おなじ△前クセ▽に出る「あをやぎ」の意に  
読むのであろう。

△田村▽にとって、楊柳は、清水寺縁起伝説  
に欠くことのできぬ観世音示現の木である。  
△田村▽が下敷きにした形跡の顕著な△花  
月▽―島津忠夫氏『能と連歌』所収△田村▽  
の考察をめぐっての試論▽―の△クセ▽に  
「水の流れに埋もれて 名は青柳の朽木あり  
その木より光さし 異香四方に薫すれば  
さては疑ふところなく 楊柳観音の御所変に  
てましますかと 皆人手を合はせ」という楊  
柳なのだ。いま、各流とも「青楊(陽)」の影み  
どりにて」と正へサシ込んで大小先でヒラ  
き、△上ゲ端▽後、「緑もさすや青柳の」と  
正先へ打ち込んでヒラくのは、△クセ▽を舞  
うときの定型といえは定型なのだが、そして、  
その定型がいつごろ固定するのも、今後の  
研究課題なのだが、わたしのいう「能作モザ

ック構造」、すなわち、辞句に型を付け、ハ  
ヤシの手を付けるといふ順に作が出来てゆく  
だけでなく、逆に、定型に辞句を当てはめる、  
あるいはハヤシの手組みに辞句を当てはめて  
書くということが、かなりの蓋然性をもって  
いえるという仮説を、わたしは立てている。  
つまり、二度、舞台中通りで正を望んでヒラ  
くのは、△前クセ▽のオブジェ(主題的景物)  
ともいべき楊柳を正面の先に想定している  
と解していい、と思うのだ。

『談儀』の「別本聞書」のくだりに見える  
『セイスイジノクセマイ』が清水寺縁起を語る  
曲舞のその一とすれば、△花月▽の△クセ▽  
がその二、この△田村▽の△前クセ▽はその  
三、といういきさつになるであろう。これも各  
流正面先に想定する「音羽の滝」は『今昔』  
等に見える黄金の水の源に落ちる滝とオーヴ  
アーラップしているし、「緑もさすや青柳」  
は「枯れたる木なりとも、花さくら木」とい  
う観世音の誓願(『千手陀羅尼経』梁塵秘抄  
等)につながってゆく。

狂言や『閑吟集』にのこるように、室町期  
の放下の謡いものに「音羽の嵐に地主の桜は  
ちりぢり」と謡われ、小歌に「地主の桜は  
散るか散らぬか」と好き心を比喩的に謡う中  
に引かれる清水寺の地主神地主権現の桜は、  
都の春の名物であった。その地主の桜が柳と

ともに《田村》の《前クセ》の(主観的景物)となつてゐる。

柳と桜はこのくだりをカラフルに仕立てあげる。作者の念頭には「見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」(『古今集』春上・素性)があつたのではなからうか。伊藤正義氏のいわれるように、《田村》は「修辭的には禅竹の特徴を示す部分があり、禅竹作の可能性があらう」(集成『謡曲集』解題)。

そして、《西行ノ歌》「それ花は……」のひとつくだけは、世阿弥の『五音』(下)に世阿弥自身の作書・節付けの闌曲として掲出されているが、それを取りこむ完曲《西行桜》の世界、ことにフィナーレの、夜明けとともに薄れゆくおのが存在を確認するかに「待てしばしノ、夜はまだ深きぞ 白むは花の影なりけり よそはまだをぐらの」という、晩唐詩にも通う切実な心緒、あたかも時間が見えるような極まった情調は、堂本正樹氏が禅竹作と決定的にいわれる(『世阿弥』)が納得できるのだが、その《クセ》の冒頭が「見渡せば……」であり、《序之舞》への導入部に「春宵一刻……」の蘇東坡詩を引いて、千金にも替えがたい春のひとつきを惜しむが、《田村》も同詩を引いて明けやすい春の宵と春の嵐に散りやすい桜花を惜しんでいる。《田村》の用いる辞句の情調やレトリックの問題は、先引の島津

氏の所論と伊藤氏の解題のすでに触れられるところとして、《前クセ》に禅竹は幽玄「見様躰」の作例として、世阿弥伝書に見えぬ《田村》の「しゅんせう一こく……」の《詠》《クセ》ドメの「あらおもしろのはるべ哉」を掲出し、世阿弥が好んで引いた「景中に心あり」という「詩人玉屑」に見えるフレーズを踏襲してコメントしている。ここに引かれる「やら／＼面白」は、月明に映える爛漫の桜花が春の嵐にふぶかれて散り舞う光景であり、それを惜愛する心緒もまた、ちりぢりに乱れるさまを語りあげて妙である。これも昨今禅竹作に比定されることの多い《熊野》の「降るは涙か 降るは涙か桜花散るを惜しまぬ人やある」のひとつくだけは、ここと風景・情調のあい通うところであるが、扇で花を受ける《熊野》の型を、後世の観世流者が、替の型としてここに代入したのは、うべなるかなと、膝を搏くのだ。

前シテの《上歌》ドメは、いま下懸りで「四方の山並みのどかなる 春の景色はおもしろや／＼」という。現今下懸の三流の伝える本文、「やらやらおもしろの 地主の花や(禅竹「よ」候やな)が『五音三曲集』に見られるとおりに本来であり、後の出の《上シ》「あらおもしろの折からやな」が、車屋本以下の伝えるように本来であつたと思われ

るが、それぞれ、「あらあら 地主の花の色やな」、「あらあらがたの御経やな」と改竄した上懸りが、即物的表現であつた前シテの《上歌》ドメを「四方の山並みおのずから 時ぞと見ゆる気色かな」と、やや観念的で曖昧な、そして禅竹的な、あまりに禅竹的な表現に書きあらためているのは、むしろ前場全体の情調に同化していると、わたしは評価したいのだ。

その禅竹なら、《前クセ》が月明から白昼になる気味あいはありながら、桜・柳・桜・柳・桜と、まさにこきまぜて、春の錦を現出しようとしたのは、《竜田》のもみじの紅と川波の白をとりあわせた手法と共通だと理解できるし、《前クセ》ドメの『朗詠』「三月三日」の詩を引く「天も花に酔多りや」は、禅竹作の《小塩》の《入中入り》前の「天も花に酔多るらん」を思う。天が花の色にうつろい染まるというのは、禅竹の胸をかき立てる情景であつた。

享受者・継承者の感性はたいせつにし、し、能作史に享受史を重ねて行く作業を通じて、創造的な能作の読みが生まれてくると、わたしは思っている。

(シテ方・観世流)